

# TENURE TRACK

## Newsletter

大阪市立大学テニュアトラック  
ニュースレター  
文部科学省 科学技術人材育成費補助事業  
テニュアトラック普及・定着事業



公立大学法人  
大阪市立大学

2016

VOL. 5

文部科学省 科学技術人材育成費補助事業の採択を受けて2013年度から開始された本学テニュアトラック普及・定着事業の運営委員長が、2016年度から、宮野道雄 前理事兼副学長(現学長補佐)から櫻木弘之 理事兼副学長へ交代しました。櫻木運営委員長からのメッセージを紹介します。



大阪市立大学 理事兼副学長  
テニュアトラック普及・定着事業運営委員長

櫻木弘之

Hiroyuki Sakuragi

本学は文部科学省・科学技術人材育成事業の採択を受け、2013年度よりテニュアトラック(TT)普及・定着事業を開始し、本年度で足掛け4年目となります。本年度よりは、前任の宮野道雄・前理事兼副学長(現学長補佐)より私が運営委員長を引き継ぎ、実務会議の皆様、育成部局である複合先端研究機構および都市研究プラザの関係者、評価委員の先生方をはじめ、多くの方々のご協力を得て本事業を継続することが出来ました。

本事業も4年目に入り、昨年度までの成果を中間報告書として取り纏めるとともに、着任後2年を経過した4名のTT教員に対する中間評価を実施いたしました。これを受けて、中臺(鹿毛)枝里子 TT特任准教授と蔡凱TT特任准教授の2名がテニュア資格審査の申請をされ、審査委員会による厳正な審査の結果、両名のテニュア資格が認定されました。その上で、本学の人事委員会による審査を経て、正式に本学の専任教員(いずれも准教授)として採用されることとなりました。これは「自立した研究環境と

資金を提供して育成した優秀な若手研究者が、安定的な職(専任教員)を得て研究を更に継続・発展させる」という、本事業の最大の目標を成功裏に達成した最初の事例となりました。

また、同じく2年を経過した麻生隆彬 TT特任講師については、他大学の専任教員(准教授)として採用されることとなり、本年1月末をもって転出されました。これは「育成した優秀な人材の流出」という見方をすれば、本学にとって痛手でもありますが、一大学の枠にとらわれず、当該研究領域あるいは社会全体という広い視点に立つならば、「優秀な若手研究者が自立した研究を継続・発展できる安定的な職と研究環境を獲得する」という本事業本来の目的にかなったものであり、これも一つの「成功事例」として肯定的に捉えるべきだと思います。

本年度は、この3名を含む5名のTT教員それぞれが、各分野で優れた研究成果をあげ、それらが競争的外部資金獲得にもつながっています。また、本事業の一環として毎年開催している「OCUテニュアトラック研究集会」を、今年度はす

べての企画・運営をTT教員が主体となって開催した点も含め、TT教員がPI(Principal Investigator)として自律的に研究活動を展開していく能力を十分に獲得しつつあることの傍証であると言えます。

更に本年度は、総合大学である本学の特徴を活かすために、本事業の重要な取り組みとして予定されていた「文系分野での本学独自のTT教員の公募・採用」を実施し、都市研究プラザを育成部局に、アーツマネジメント分野のTT教員1名が新年度より着任する予定になっています。更に、文部科学省が今年度より開始した「卓越研究員事業」について、2017年度の募集に対して部局型TT教員ポストを複数提示するなど、本補助事業終了後のTT制度の普及・定着を視野に入れた取り組みも開始しています。

最後になりましたが、本事業事務局として運営の土台となりご尽力いただき、本年度末でご退任される本事業コーディネーターの福本晃二氏に心より感謝申し上げます。

## 2016年度テニュア資格審査合格者から

2016年度においてテニュア資格審査に下記2名が合格しました。着任からテニュア資格取得までで苦勞したこと、本学のテニュアトラック事業・制度についての感想、今後の抱負などを述べてもらいました。

### 中臺 枝里子 教員

本学には2014年2月、テニュアトラック教員としては(わずか1ヶ月違いですが)最初に着任しました。初めは私も(もしかすると大学側も)慣れないことが多く、右往左往しました。生まれは九州、大学院からはずっと東京におりましたため、関西の、しかも大阪の、しかも南のコアな場所にやってきて、文化の違いなどでいくつも失敗しました。しかしさすがは人情の街の大学、多くの方々に助けられて今に至ります。

テニュアトラック制度では、30代の研究者としては潤沢な研究資金と独立したスペースが与えられますが、これは本当に有難いサポートの一つであり、なくてはならないものだったと思います。また大学の運營業務などがかなりの割合で免除される仕組みであったため、テニュア資格取得まではひたすら研究に専念させて頂き、とても充実した研究生活をおくることができました。とはいえ、結果が全てのシビアな制度でもあります。必死で申請書を書き、論文を書き、どこかに向かって休みなく自転車を漕いでいる気分であったことも否認しません。

今後は、食や健康をキーワードに、線虫 *C. elegans* をモデル生物として用いて健康長寿社会の実現に少しでも貢献できるような研究を進めていきたいと考えております。そしてこれまでの恩返しの意味も込めまして、教育や大学運営にも力を注いでいく所存です。

東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了。  
製薬会社研究員、東京女子医科大学医学部第二生理学教室講師などを経て現職。博士(薬学)。



### 蔡 凱 教員

最初に自分の研究室に入ったときのことを鮮明に覚えています。スタートアップ資金で購入した器材が入った箱が積み重なっていて、数週間はセットアップに時間をとられました。時間はかかりましたが、楽しい時もありました。その後、テニュア・トラック事業スタッフからの強力なサポートもあり、研究をスムーズに進めることができました。特に、都市研究プラザ、工学研究科から提供された研究環境のおかげで、新しい成果を生み出すことができ、その成果を著書として出版できました。最初の実験室が他の研究者との共有であったことや、実験室を2回移動するなどの苦勞もありました。

テニュアトラック制度については、以下の3点が最も重要だと思います。

1. スタートアップ資金提供によるスムーズな研究活動の開始
2. 独立した研究環境の提供と研究エフォート率の保証
3. テニュア資格審査合格後のテニュアポストの保証

テニュア・トラック制度のさらなる改善のためには、テニュア・トラック制度と校則との包括的なチュートリアルを整備、テニュア・トラック機関と大学機関とのより良い連携、テニュア教員と同等の魅力的な給与や利点の提供などが望まれます。

専任教員になった後は、研究と学生の教育の両方において卓越した成果を挙げていき、さらに研究以外の業務にも貢献していきたいと思っています。

東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。  
トロント大学(カナダ)電気・コンピュータ工学科にて博士研究員、東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学特任助教などを経て、現職。博士(学術)。



## 大阪市立大学テニュアトラック普及・定着事業の中間報告書について

2013年度から開始した本学のテニュアトラック普及・定着事業のこれまでの主な活動などを中間報告書にまとめました。下記ホームページに掲載しましたので、ご一読いただけましたら幸いです。